

小説部門優秀賞

僕らは集まり文字となる

盛岡第四高校1年 高橋舞

「僕に文字を教えてくれないかな」

目の前の男から発されたその言葉が、空気を震わせながら伝い、僕の耳に届く。

夏のにおいをたっぷりと含んだ風が市立図書館の窓から入り込み、僕の頬をゆつくりと撫でていった。その風をうけてカーテンがはためき、陽の光がひらひらと僕らを照らしている。

（：：もじを、おしえ、る？）

全く概要がつかめない。もしかして何かの隠語か。それとも、ジョークなのだろうか。というかそもそも僕と彼は一度も会ったこともない。それなのにどうして彼は、僕なんかに話しかけてきたのか。

「今日は天気が良いのかな。風が気持ちいいね」

状況を整理するため、ここにこと何やら話しかけてきている目の前の人物を観察してみよう。青い半そでシャツに、黒いズボンを履いた、爽やかな印象を与えてくる服装だった。そして、一番重要な部分にはサングラスが、ま

たその手には白い杖が構えられていたのだ。

高校二年生の夏。皆が秋の新人戦へ向けて熱い思いをぶつけあい、より一層夏を暑苦しくしている中、帰宅部の僕はとうとう、放課後に持て余した時間を、高校のすぐ近くにある冷房のよく効いた市立図書館でぼーっとする。この市立図書館は、他の所に比べると珍しく数多くの点字図書が用意されているらしく、ここでは毎日たくさん白杖をつけている人を見かける。つまり、昨日声をかけてきた彼もその中の一人だったわけである。

すると、軽い音を鳴らして反対側の入り口の扉が開かれた。そこから、紛れもなく昨日の彼が入ってきたのを見て、僕は小さく驚きの声をこぼしてしまった。この部屋には点字の図書はない。しかも彼は、入ってきたかと思えば、何をしてもなくただ入口のすぐそばの椅子に座るだけだった。なぜ彼がここに来たのか考える。昨日僕は、用事があるからなど嘘をつき逃げてきてしまった。それでもなお彼が僕に会いに来てくれた可能性を考えると、なんだか気が引けてきて、僕は本を閉じて声をかけることにした。急に声をかけたら怖がらせるかもしれないと、少し緊張しながら、肩に優しく触れてトーンを落とす。みません」と名乗ろうとすると、彼はふふつと笑った。「やっぱり優しい」

「え」

「優斗君、だよ。僕がびっくりしないように、そつと声をかけてくれたんでしょ。僕の思った通りだ。優しいね。」

「いや、何というかつコミ所が多すぎる。そんな少し声を聞いただけで、名乗らずとも誰か分かるものなのか。その前になぜ僕の名前が優斗だと知っているのか。」

「声をかけたのとたんになにが急に褒め始めてきて、反応に困ってしまった。頭がなかなか追いつかず、一応お礼を言おうとしたがついさうしない敬語になっちゃった。」

「それを聞いて、彼は愉快そうに笑っていた。なんだか、そのふんわりとした彼の雰囲気になんか悪くなり、顔を逸らして誤魔化すように、そんな笑わないでくださいよと、口をとがらせながら隣に座った。」

「あれ、光汰君。どうしてこんなところにいるの。」

「え、あ、愛さん、ですか。」

「なにやら、横から気になる声と会話が聞こえてきて、嫌な予感を感じながらも状況を確かめる。聞こえてきた「光汰君」というのは、間違いない。昨日から何度も僕の前には現れてくる横の「彼」であり、「愛さん」というのは、あのかの有名なわがままお嬢様こと僕の「同級生」であった。彼と彼女は、何やらそれなりに仲良さげに話している。」

「というか、どうして優斗と一緒にいるの。愛が急に僕のほうを向き話しかけてきて、」

その質問に答える前に露骨に嫌な顔をしてしまふ。

「あれ、二人は知り合いなんだ」

「ん、まあ。同じクラスだからね」

なんだその声。そんな優しい声初めて聴いたぞ。

「そっか、いいなあ。二人がいるクラスなんて最高じゃん」

「それで、光汰君と優斗はどうして一緒にいたの」

どうしても気になるのか、愛はまたその質問をした。それに対して、光汰が言いよどむ。

何度か何かを言おうと口を開け、また閉じるを繰り返しながら光汰は、何かを考えて照れたように笑い、やつと口を開いた。

「文字を、どうしても書けるようになりたくて。だから、急なお願いで申し訳ないんだけど、優斗君に教えてもらいたいんだよ」

本当だ。何が何でも急すぎる。急すぎる、のだけれど、それでもなぜだろう。光汰の何ともまっすぐで、体の中芯から優しさが溢れているかのようなその声に、揺らぎかけている自分がいるのを何となく、徐々に僕は感じ始めている。

「何で優斗がいいと思ったの。多分、あまり話したことなかったでしょ」

愛は、この場所で自分が頼られなかったのに納得がいていない様子で話しかけた。

しかし、それに対して彼はニコニコしながら僕のことを嬉しそうに褒め始めた。

「んーとね、僕ってやっぱり目が見えないからさ。周りの音が本当にたくさん聞こえてくるんだよね。人の会話とかも。盗み聞きするつもりがなくても、情報としてふつと耳に入ってくる事があつてさ。それで、この前廊下で優斗君が、学校の友達と話しているのが聞こえてきて」

光汰は、その時に僕が一番優しそうで聞き取りやすい声をしている、さらには「万年国語で成績トップの天才」だと思ひ込んだため、どうしても僕にと頼みに来たというのだ。あまり褒められ慣れていない僕は、そのマシガン褒め攻撃に思わずにやけてしまう。さ、さ、さ。このままでは、本当にこの男に絆されてしまいたいそうさ。

「無理ならしようがないけど。でも、僕は優斗君が良いしなあ」

「：：ふーん」

すると、愛が全てを聞き終えてから、やっというろいろな感情を含ませたような相槌を打った。彼女の機嫌を損ねると色々厄介なことになるという過去の経験から、僕は愛の様子をびくびくしながら覗いた。

「まあ、光汰君がそんなに気に入ってるならいいと思うけど：：だったら私も協力させてほしいな。ダメ、かな」

光汰に見えるわけでもないのに、愛は上目使いをしながらかく首を傾げて猫なで声を出した。僕はそれに圧倒されるばかりだった。が、光汰はこちらが心配になつてしまいうくら

いに耳まで真っ赤にさせていた。
 「んえ、あ、うん。もちろんそれは嬉しいけど物凄く。いいのかな、ありがとう。本当に」
 やめておけ、と今の光汰に心の中で伝える。
 にわかには信じがたいが、おそらく光汰は愛にだいたい惚れこんでしまっているようだった。
 「うん。んで、優斗はやるの、やらないの」
 光汰に対してにこやかに返事をしてから、愛は表情を変えてどんどん迫ってくる。その様子は、さながら崖に追い込まれたウサギとそれを狩るオオカミのようを感じられた。
 「わ、かった。やる、やります」
 二人の圧に負け、僕は本を抱きしめながらこの崖から飛び降りるような思いで光汰の頼みに応じることになったのだった。
 その日、家に帰って冷静に考えてみると、目の見えない彼に文字をどう教えたらいのか、が見当もつかなかった。ネットでも調べてはみたのだが、検索で出てきたやり方というのは僕らにはまねし難いものばかりだった。
 結局何の収穫もないまま、時間は容赦なく過ぎ、もうすでに僕たちは昨日と同じ席に着席済みだった。さすがに沈黙しているわけにもいかず、さてととカバンから紙と筆記用具を出してみるが、何の言葉も出てこない。
 仕方がない。本当ならば使いたくない手ではあったが、この際こうするしかない。と覚悟を決めた。
 「じゃあ、失礼します：：」
 そう言って、そつと後ろから光汰の手を掴

み、ペンを握らせた。はたから見れば、奇行にも見えかねない。その僕の行動に愛も訝しげな表情だった。何が悲しくて大衆の面前で男同士密着しななければならぬのか。でも、これしか思いつかなかつたのだから諦めるしかない。光汰の手を使いながら、これは「あ」で：：などと何度か書いて教えてみる。

ある程度時間をかけてから、文字を書く感覚にはしゃいでいた光汰から離れて「あ」の文字を自分で書かせてみる。もちろん、これだけでそんな完璧になんて書けるわけはないと分かっていているが、これくらいどの程度書けるものなのかを知りたかつたのだ。

しかし、実際そこに現れたものは点と極端に薄くなったり濃くなったりした線が絡み合つた、とても文字とは言い難いものだった。彼は、小学校に上がる少し前に事故で視力を失ってしまったのだ。だから、文字の概念は分かつていても、書けない。それは分かつていたのに、そうはいってもなんだかんだ上手いくだろうと甘く見てしまつていた。思つていた以上に、僕は無謀なことに頭を突っ込んでしまつたのかもしれない。

「うーん。ごめん、ね。うまく書けなくて」何も言えないでいる僕と愛にその空気を感じ取つたのか、光汰が本当に申し訳なきように謝つた。光汰に謝らせた自分が情けない。「いや、こちらこそごめん。光汰君は何も悪くない。僕が考え足らずだつた。ごめん」

「そうそう、全部優斗が悪いんだから」

愛が僕の感情の傷に塩を刷り込むような言葉
 を付け加えてくる。
 「うっ、いやそうだけど」

「最初なんてこんなもんだよ。まだここから。
 優斗の文字の方が読めないし」

それでも、愛が思っていた以上に優しく良
 い事を言ってくれたことに驚きながらも、や
 っぱり僕の中では悔しさと申し訳なさが尾を
 引いていて、うまく笑えなかった。

結局その後は、どうしたらいいだろうか
 三人で話し合い、何でもいい考えは思いつかな
 いまま、また明日会おうと約束だけして別れ
 た。僕らが悩めば悩むほど、光汰は申し訳な
 さそうにするばかりで、少しでも早く突破口
 を見つけたいと思う一方、アイデアのアの字
 も出ない自分に本当に腹が立った。

「優斗はもしかして本の近くで生息してるの」
 そんな素敵な冗談を、図書室で会って早々
 に言ってくれたのは愛だった。

昨日、自分の無知に打ちひしがれた僕は、
 昼休みのチャイムが鳴ったその瞬間に図書室
 へと向かい、障害のある人のことを調べてい
 た。椅子に座り、僕が一冊本を読み進めてい
 るとちまちまと人が来はじめ、その中に愛も
 いたのだ。座っている僕を見下ろしている愛
 の手には何冊か本が抱えられていて、その中
 には「わかる視覚障がい者へのサポート」
 という本もあった。僕が思わず書名を口にす
 ると、「あ、ちよ、読み上げるのは違うじゃ

ん」と照れたかのように愛は持っている本を
 隠してしまつたが、それ以外の本もどうやら
 そういった内容のようだった。
 愛は何も気にせず光汰といるように見えて
 いたため、それは物凄く意外に思えた。気付
 かなかつた。彼女は彼女なりに、いや僕以上
 に、考えて、光汰を思つてずっとそばにいた
 のだ。愛と話しているときの、光汰の顔を思
 い出す。きつと、常に人に気を使われて生き
 てきた光汰にとつてその何倍も、自然に接し
 てくれる愛の存在は嬉しかつたに違いないと
 思う。
 「あのさ、優斗。そんなことより、今日書道
 のときに思つただけど」
 と、愛はそう言い、本と一緒に持っていたら
 しい、習字の下敷きと紙を一枚取り出した。
 そして、習字をするときのように紙を置き、
 そこに何やら文字を書き始めた。
 「こうやって、柔らかい下敷きの上からちよ
 っと力を入れないながら文字を書くとき」
 愛の綺麗な指で、これまた綺麗な文字をそ
 の紙に書いていく。
 「ほら見て、文字の部分がへこんで形が分か
 るの。：：これさ、光汰君に教えてあげるの
 に使えるんじゃないかな」
 「ちよ、ちよつと触つてもいいかな」
 愛が手渡してくれたその紙を手でなぞる。
 はつきりと浮かび上がったその文字の手触り
 に高揚感を覚え、思わず息が漏れてしまった。

「どう、使えそうかな」
 「すごい：：。愛、本当に凄いよ。天才だ。ありがとう」
 感動のあまり、声が徐々に大きくなり僕は愛の手を取って立ち上がった。これなら上手くいく、そんな予感がした。
 「よし。じゃあこれでやっとなと光汰君に文字を教えてあげられるんだね。楽しみ」
 そう言い、嬉しそうに笑う姿に、これは本当にあの愛なのだろうか、と思ってしまう。この数日、なんだか愛の意外な一面を山ほど見たような気がした。

その日の放課後、心なしか自分が大きくなったかのようにな、そんな自信に満たされて図書館へと向かった。昨日と同じ一般の図書室では、他の人たちの邪魔になっってしまうかもしれないと考えた僕たちは、そのすぐ近くにある「自習室」と書かれた部屋で、練習をすることにした。

光汰がしっかりと座ったことを確認して、愛に持ってきてもらった例の道具を広げる。座り方は、光汰の右隣に僕、その向かいに愛。僕が光汰の手を取り、その手を愛の書いた見本の上へと持っていく。しっかりとへこんだその文字を、光汰に指でなぞらせる。光汰は、とても興奮した様子で初めて感じた「文字」を、確かめるようにゆっくりと何度も触った。すごい、と十回は言っていたと思う。

なんとなく「あ」の形分かってきたかも、
 と光汰が言い始めたタイミングで、次はその
 右手にペンを握らせ、自分が書いたその線と
 見本の文字を左手で交互になぞり、確認させ
 た。
 結果から言うと、このやり方は大成功だっ
 た。途中で力を入れすぎて紙が破れてしまっ
 こともあったが、即座に愛がもう一枚紙を出
 し、その紙を僕が二枚重ねにする、という我
 ながらいい連係プレーだった。
 も、もちろん、まだ完全だとは言えない。しか
 を要する事も発覚したが、でも確かにそこに
 は「あ」の文字があった。少しずつ少しずつ
 出来る上がるその字に興奮している僕がいた。
 一生懸命になぞりながら書き進める光汰の横
 で、愛と顔を見合わせ二人でニヤニヤしてハ
 イタッチをした。書き終えた光汰も、初めて
 自分が文字を書いたことに感動したのか、し
 ばし放心状態だった。
 「すごい：：書けた。書けちゃったよ、僕」
 そう言った光汰が、本当に柔らかい顔であ
 りがとう、これからもよろしくお願いしま
 と笑ってくれて、なんだかホッとした。
 それから僕たちは、毎日のようにこの図書
 館の自習室で集まり、文字の練習をしたりだ
 べるだけで帰ったりと、気づけば一か月がた
 っていた。時間の流れとは素晴らしいもので、
 それはお互いを呼び捨てで呼べるようにし、
 あんなにも渋々許したそれは、気づけば自然

と僕の生活の一部になっていた。僕が一番好きな言葉は「いのちだいじに、ガンガンいこうぜ」だが、その次に好きな言葉に土方歳三の「面白きこともなき世を、面白く」というものがある。初めは何となくカッコよさから好きになった言葉だった。しかし、二人に出会い僕は、何事も自分が面白くないと感じてしまうのは自分が無知だからだと、思うようになった。だって、あの時に僕が知ろうと一歩踏み出さなければ、こんな楽しい日々を、世界を知らなかったのだから。光汰は、「見えないからできない」は嫌だと言った。見えなくたって、教えてもらえばできることがこの世界には沢山あると彼は教えてくれた。愛は、だから見れば自分勝手な人にも見えるけれど、本当は誰も知らない所で人の事を思い、その人の為に行動できる人間だと知ることができた。僕にそれらを教えてくれた二人の事を、僕は素直に凄いと思う。

「あれ、そういえば、光汰君は何で文字、書きたいと思ったんだっけ」

そう聞いたのは愛だった。光汰は、いつの間にか僕の手伝いがなくともできるようになった。書いていた文字の練習を止め、困ったような顔をしながら光汰はひとしきり悩んだ挙句、覚悟を決めたように「実はね」と口を開いた。

しかし、ちょうどそのタイミングで光汰のスマホが騒がしくバイブレーションで揺れた。光汰は、この揺れ方は母さんだ、などと言いだした。

ながらスマホを耳につけて音を聞きながら、慣れた手つきで操作した。『光汰、今どこにいるの』と向こうから凄まじい勢いの声が聞こえてきた。その声に光汰は慌てふためき、僕はその相手に苛立った。光汰は、自分を落ち着かせようと息を吐きながら、電話の相手の話を聞いていた。その声は、こちらにまで漏れ聞こえてくる程大きく、母親が一方的にまくし立てているようだった。「今、弟がどういう状況か分かってるの」

「うん、そうだね。：：ごめんね」

光汰は、母親に対して、何度も繰り返しそればかり言っていた。相手の言う言葉をすべて受け止めるかのように深く頷く彼に、事情は何も分からずとも胸が締め付けられる。眉をひそめ、光汰の顔はつらそうに歪んでいた。程なくして、電話を終えた光汰は「怒られちゃった」と笑ってきて、僕はなんと声をかけるべきかが分からなかった。

沈黙の中、言葉を探す僕と愛の代わりに声を発したのは、光汰だった。

「さっきの質問の答えなんだけど：：実は、僕の弟、不登校なんだ」

その告白に、僕は言葉を失いじっと光汰を見つめてしまう。ただ事ではないと思っていながら、それ以上に深刻で非現実的にも感じる響きが、そこには漂っていた。「中学校で、いじめがなかったらしいんだよね」

向かいに座る愛と僕は、息をのみながら光
 汰の話聞いた。――あ、弟がいじめられたんじゃなくて、他の
 子だったんだけど。なんかね、クラスでそう
 いうのが起こってるっていうのが、凄く、し
 んどかつたらしくて――
 光汰は、眉をひそめながらゆっくりと話し
 ていた。机の上に置いた右手を、自分を安心
 させるようにもう片方の手でさすりながら、
 彼は話を続けた。
 「優しいんだよね、陽汰は。あ、弟の名前ね。
 : : まあ、それからだんだん学校に行くのが
 苦しくなってきた。ある日ね、部屋からも出
 られなくなってきた――
 おそらくいつも通りに振舞おうとしている
 光汰の言葉の端々に、何かをこらえるような
 雰囲気を感じて胸が苦しくなった。
 「さっきのわかると思うけど、母さん大分
 まいっちゃって。まあ、僕らを産んですぐ
 に父さんがいなくなつて、女手一つでずっと
 支えてきてくれたから。目の見えない僕の次
 に、弟が不登校になるって: : やっぱり、ね」
 彼は今までどれだけ多くのことを感じ取つ
 て、生きてきたのだろう。誰よりも人の感情
 の機微に敏感で優しい彼にとって、それらは
 どれだけ苦しく痛いことだったのだろうか。
 『うん、そうだね。: : ごめんね』
 さっきの光汰の声を思い出して、なんだか
 泣きそうになる。何なんだろうか。これは。
 誰一人として悪くないのに、その全員が悩ん

で自己嫌悪までしなればいけないなんて。
 こんなに、苦しんでいるなんて。
 「だからさ、弟に手紙を書いてやりたかった
 んだ。母さんが心配するから、もうそろそろ
 決着をつけなきゃだけど」

光汰のその声に現実へと向かっていた思考が、

「……そうだね」

そうだ。僕が勝手に想像して泣いててもど
 うにもならない。今僕にできること、それは。

「光汰、大丈夫。俺が完璧に文字を書けるよ
 うにしてやるから」

(思いをちゃんと届けられるように)

「今、優斗が俺って言ったよ」

「あは、気合が違うね。本当にありがとう、
 優斗」

瞬く間に、またいつもの空気が流れてどこ
 かホッとする。やっぱ僕は二人が好きだ。
 実際にそんなこと言ったら鳥肌もんだろうけ
 ど。僕は改めて気合を入れ直すために、立ち
 上がって深く息を吸い、ほんの少しだけいつ
 もより強く吐いてみた。いのちだいに、ガ
 ンガンいこうぜ、である。

あの日から数日。光汰は、ついに僕たちの
 助けがなくなるとも言葉を書くことができるよう
 になつていた。

しかし、ちようどその時期に光汰の母親が
 倒れ、心配だから、と光汰は図書館に来れな
 くなつてしまった。今は、退院こそしたものの

の、これ以上心配をかけるわけにもいかない
 と、遂に光汰が自分の家で、弟への手紙を完
 成させようという運びになったのだ。
 光汰が弟への手紙を書き終える、その瞬間
 に立ち会えないことを残念に思いながら、な
 んだか光汰たちもいないのあの図書館に行
 く気にもなれずに、ただ家と学校を往復する
 日々を過ごしていたある日、光汰から待ちわ
 びていた連絡が入った。
 「手紙が完成しました」
 帰宅部の足の見せ所である。

彼が弟に向けて、どんなメッセージを送つ
 たのか見てみたかった。
 自転車で立ちこぎをする僕の目の前に勢い
 よく車が割り込んできて、ブレーキを強く握
 る。運転手の男と目が合い、軽くお辞儀をし
 た。再び動き出した僕の足は、またいつの間
 にか速さを増していた。だんだん見えてくる
 久しぶりの図書館の姿に気持ちちはやって仕
 方がなかった。道路わきの伸びきった草が膝
 に当たって痛い。しかし、そんなことさえも
 どうでもいと思えた。
 もしも、僕だったら：：閉じこもってしま
 った弟に対して、部屋にというより自分に閉
 じこもってしまつた弟に向けて、どんな言葉
 をかけてやれるだろうか。もうすでについて
 しまつた駐輪場からいつもの自習室につくま
 での、もの十数分で思いつくはずもなかつ
 たが、考えずにはいられなかつた。

言葉たちで伝えるのか。彼ならどんな
 も通りクラーがよく効いて汗ばんだ身
 体に心地よかった。自習室へ向かいゆつくり
 と歩きながら、なぜだかいつも通りの廊下な
 のに少しだけ緊張しているような、不思議な
 感覚になる。少し息を切らしながら扉を開け
 ると、すでに愛と光汰が座って待っていた。
 愛は、光汰に僕が来た事を伝えてから、こつ
 ちへ顔を向け「優斗、遅い」と口を尖らせた。
 「光汰、書けたんだよな」
 「あ、無視された」
 僕の反応に少し不満そうな顔をしながらも、
 愛もゆつくりと光汰の方へと顔を向ける。
 「光汰君、見せてもらってもいいかな」
 「う、うん：：」
 そう言うと、光汰は少し顔を赤くさせて、
 躊躇うようにゆつくりと手元のファイルから
 手紙を取り出す。それはしっかりと封筒に入
 れられていて、中身はまだ見えない。
 「あ、あのさ。本当にありがとう。僕のこん
 なお願いに付き合ってくれて。二人のおかげ
 で：：多分二人がいなかったら、こんな頑
 張れなかつたし、これ書けなかつたと思うか
 ら。本当にありがとう」
 そう言われて、こちらこそ心の中で呟き、
 力強くうなずく。光汰にはそれは見えてはい
 なかつたはずだが、優しい顔で「うん」と答
 えてくれた。

「じゃあ……絶対笑うなよ」
 光汰は少しおどけてそう言い、意を決した
 ように、ついに封筒から便箋を取り出した。光
 汰はゆっくりと便箋の上を手で探り、折りた
 たまれている部分を開いていく。僕の目はそ
 の動作に釘付けになり、心臓が耳のすぐそば
 にあるのかと思うほど大きく脈打った。
 やっとその紙が開かれると、書かれている
 文字が露わになった。僕の人生でこんなにも、
 文字を集中して読んだことはないというほど
 何度も何度も心の中で読み上げ、そこに込め
 られた思いを噛み砕くように反芻する。

（まじかよ）

そこには、僕が想像していたような長文の
 メッセージではなく、たった一言が書かれて
 いた。これを、言いたかったのかよって、そ
 んなの、駐輪場からのたったの十数分でも出
 てくるだろって、正直思った。でも、実際は
 その一言が出てこなかったのだ。わざわざ気
 が遠くなる程のとてつもない苦勞をしてまで、
 弟に伝えたかったこと。可能なら、本当はす
 ぐそばで言っただけで済ませたい。けれどど
 の努力がそこにあっただのか、伝わってくるそ
 の文字が、自分ではどうすることもできずに
 ぼやけてくる。鼻をずっと鳴らしながら、
 無性に声に出したくなり、呟いてみる。

「そんなときもあるよね あにより」

心を抱きしめられる。そんな感覚があった。その人のことを本当に親身に考えてきた人間だけが響かせられる言葉。奇をてらったビツクマウスや計算しつくされたキャッチコピーとは違う。何気ないようにも見えるその言葉の裏側に、愛情がべったりと貼りつけられていた。胸の内側の中の中から温かくなって、くすぐったくて、愛されてるんだって涙が出てくる感じ。どんなものも、やっぱり最も近くにある愛には到底敵わない。

気づくと愛も僕も大号泣していて、なんだか笑えた。

「うん、いいね。本当に」

「あはは、ごめん。せっかく素敵な手紙なのに濡らしちゃったらどうしよう」

愛が少し手紙から離れて、顔を手でパタパタと扇ぐ。

「これ書き上げるのに思ったより時間かかったやつて、母さんが何回も見に来ちゃうから恥ずかしかったよ」

「お母さんは、なんて言ってたの」

「そう聞くと、光汰は嬉しそうにはにかんだ。母さんも二人みたいに大泣きだったよ。ごめんとかありがとうとか、光汰がいてくれてよかったとか：：あはは、自分で言うの恥ずかしいね。でも、最後に抱きしめてくれて、うん、嬉しかった」

「そう笑う光汰をどうしようもなく抱きしめたい衝動に駆られて、愛と示し合わせたかのようにそっと両側から挟み込む。光汰は、一

瞬驚いたような顔をして、そしてまたやっぱ
 り嬉しそうにはにかみながら、抱きしめ返し
 てくれた。
 （そんなときもあるよね、か）
 なんて、頬が緩む。
 もし僕に兄がいて、この言葉を思いがけず
 かけられたら、どんな気持ちになるだろうか。
 苦しい日も、泣きたい日も、消えたいと思っ
 てしまった日も。そうか。そんな日も、ある
 のか。
 その要塞を破壊するのは、きっと光汰の弟
 にしかできない。もしかしたら、まだ時間が
 必要になるかもしれない。それでも、光汰の
 想いは必ず弟に届くと確信していた。なんせ、
 光汰はこんな凄いことをしようと思う行動力
 と弟を想う心があるんだから。
 きつと、陽汰君がついにその重い扉を開い
 たその先で、光汰はソファに座りながらテ
 レビを指さして、一緒に笑い合うのだろう。
 笑ってあげるんじゃない、心から自然と。
 もしかしたら、やってくるかもしれない未
 来を想像してみた。きつと勇気のいるその一
 歩。それで、彼が足をくじく事がないように、
 僕と愛もここで準備をしておこうと思った。
 わりと長い時間、三人で抱きしめ合いなが
 ら「良かった」とか「頑張ったね」とうわ言
 の様に言い合うという、傍から見ればかなり
 インパクトのある画に、気付くとなつてしま
 っていたが、離れようとする者はいなかった。

窓から日
の様な夏
の光が
入って
くる。
それに
すぐそば
の
三人の影
を作る
ように
。
おれは
あの時
の
強
い
日
差
し
と
お
い
で
こ
そ
な
の
汗
の
に
お
い
が
、
な
ん
だ
か
今
の
よ
う
な
、
そ
ん
な
気
が
す
る
。